

楊貴妃渡来伝承パート 3

陶磁器編

<はじめに>

歴史の旅路、パート①②で解明した「寶」の大唐から現代日本までを確認です。

楊貴妃渡来伝承の馬嵬からの海路天草そして長門。

「寶」は吉備真備の大宰府から奈良朝廷。

光明皇后・孝謙天皇の献納により七大寺。

七大寺から義満・義政の足利幕府か直接信長。

信長から秀吉、そして五大老・前田利家。

前田家代々から加賀富山藩。

1300年のリレーを経て「寶」は確実に届けられました。

渡来伝承の「一」「二」に付会なく、歴史の太脈・大本は矛盾なく考証した筈である。

しかし

- | | |
|---------------|----------------------------|
| ①何故「寶」が焼成不可能か | ②何故 30 年を費やし延人員何千万人を要したのか。 |
| ③窯場は何処か。 | ④陶土は何処からか。 |
| ⑤幻の篆刻土は誰か。 | ⑥30 年間の焼成燃料の樹木は何処からか。 |

①②③④⑤⑥この 6 つの問題をクリアしなければ本誌の完結はありません。

しかし陶芸の体験と一度も中国には旅をしておりません。

過去 33 年間、平均睡眠は 4 時間で、殆ど時間がありませんでした。

もし旅したとしても悠久の歴史と、広大な国土、13 億の人口の混沌の中で自分自身を見失いそうです。

現代はインターネットの時代です。中国各地の写真や情報が満載です。

千里眼・承禎である。①～⑥、全精力を傾けて挑戦です。

<其の一>

①何故「寶」が焼成不可能なのか。

まず伊万里焼や九谷焼の高さ 2 m 近い大壺でも、高台、胴回り、口回りの厚さ 35 mm 以上ある磁器の焼き物は愚生の知る限りありません。

反対に、現代においては卵の殻程薄いお碗の反対側が透けて見える程の焼き物は、焼成可能との事です。

「寶」の印台は、高さ 4 辺 47 mm、底部と上面 8 辺、70 mm で 1 mm の誤差はありません。

陶磁器として史上空前の立方体です。

しかも 2016 年 8 月、富山県中央研究所で断行した CT スキャンの 9 枚の、印台内部の映像に、重金属などの異物、また空洞はありません。

このような、自然火力で焼き上げた焼き物は不可能で、日本東洋陶磁学会の竹内順一名誉顧問の見解通り、地球上に一点も無い筈です。

通常、焼き物は、原料となる陶石を粉状にし、水を加え捏ねて、胎土を作り、壺とか望みの品を造形します。

「寶」は超高密度の白磁であり、胎土となる粉末は、超微粒子（パウダー状）の不純物ゼロ状態の陶土が絶対条件と考えられます。

当時は、一定割合に砕いた陶石を、水車また牛馬で石臼を引かせ、そして幾段もの沈殿槽にて集積された“超微粒子”と想像されます。

果たして、それほどの超微粒子、純度の高い、胎土が造れるのかは愚生には分かりません。



インターネットその他の資料によると、焼き物は一定期間天日に晒し、極力乾燥させ、次に $600^{\circ}\text{C}\sim 800^{\circ}\text{C}$ の低火度で素焼きし、水分を飛ばした後、最終約 1300°C 前後の高熱で本焼きにするそうです。

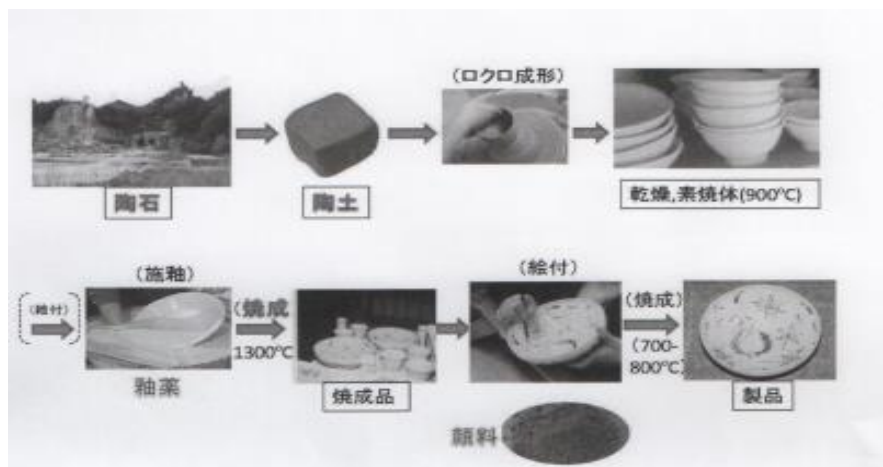
通常の磁器の焼き物では、約 1 割 5 分～2 割は収縮するそうです。

厚手の「寶」は通常の焼き物より、恐らく 2 割～3 割、いやそれ以上収縮したと想像されます。

仮に 2 割 5 分収縮した場合、原型は $47\text{ mm}\times 1.25$ で、窯入れの厚さは 58.75 mm で、高さは 4 辺均等に 11.75 mm の収縮です。(約 1.2 センチ)

印面と上面 8 辺の一边は $70\text{ mm}\times 1.25=87.5\text{ mm}$ で 17.5 mm の収縮です。(約 1.7 cm)

日本を代表する諸先生が焼成不可能と断言した言葉が、想像の脳裏を圧縮します。



素焼き本焼き、どちらも、タテ、ヨコ、高さ、ナナメ、全方向で収縮が発生します。球形は中心点より熱放射率・収縮率が一定であるが、立方体の印台は不均等で、球形・円形より何倍も困難が想像されます。

素焼きの段階で造形物に水分や空気が残った場合、空気や水は熱で膨張するので、爆発や、万化の捩れが生じ、意図した形状が成形できません。

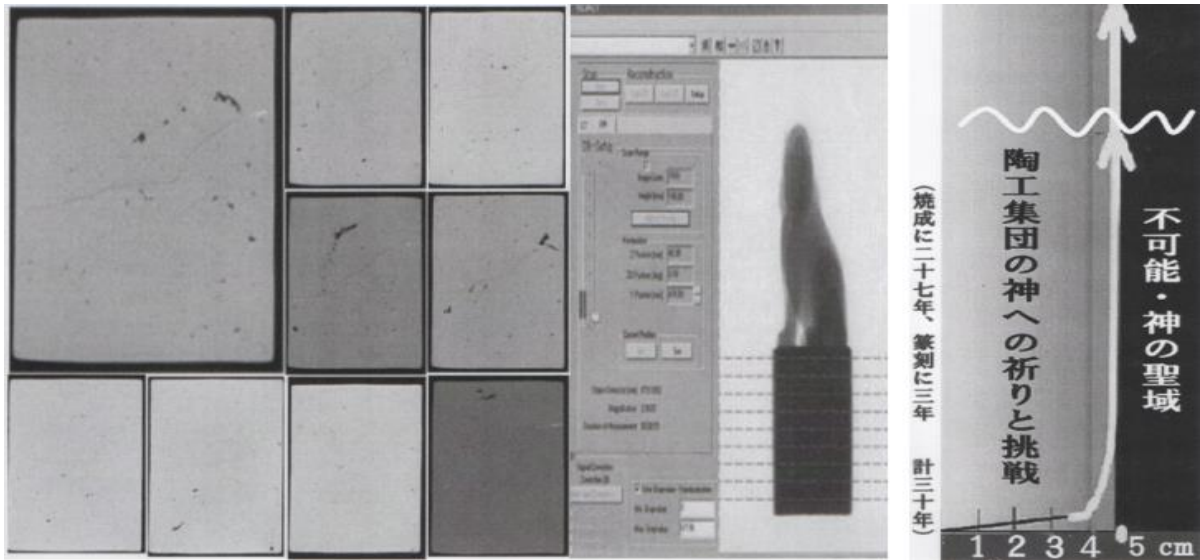
昔の蒸気機関車を想像してください。

熱せられた蒸気の膨張が、何十輻・何百トンの貨車を牽引するのです。

その水と空気の驚異的膨張と、高熱による収縮、“真逆の力”が、素焼きの 600°C 、本焼きの 1300°C 、2 度、窯の中で激突するのです。

印台内部の、零コンマ 0.0000001 mm 立方の残留水分も空気も不純物もアウトです。

「寶」は宇宙創成、太極のビックバーン、質量無限大のマグマです。



CTスキャンの写真

限界グラフの図

厚さが 35 mm以上 1 mm増すごとに、臨界点を突破、まさに神の領域に突入です。CTスキャンの断面写真を見ると、印台内部のマグマの痕跡に沈黙です。重ねて日本を代表する幾人もの研究者が“焼成不可能”と断言しております。

<其の二>

②何故 30 年を費やし延人員何千万人を要したのか。



登り窯



玄宗皇帝が「寶」焼成をスタートさせた 712 年、中国全土の陶工を一ヶ所に招集しております。

開元元年、王侯貴族の明器製作を全て“届け制”にした勅令で明らかです。

唐三彩の明器は当時王侯貴族達のステータスでした。

唐三彩は、王侯貴族達が侍女や親しかった友、諸々の生前の思い出を焼き物にして、墳墓に入れる愛玩物であります。

中国全土の陶工の召集です。

王侯貴族達は愛玩の明器を、自分の墳墓に飾ることが出来ません。

これでは中国全土の王侯貴族達に不満が生じます。

そこで、唐朝は要望があれば、望みの焼き物を受け付けるとの、特例措置を執ったのであります。

明器の唐三彩は陶器で、神器「寶」は、新時代の磁器しかも画期的唐白磁であります。陶白磁は「端溪の硯とともに天下に貴賤無く用いられた」と茶経に記された焼き物です。

「寶」スタートの「開元」時、大唐の人口は約 5000 万人とあります。



唐三彩

王侯貴族から一般庶民までの、すべての人の生活雑器が唐白磁です。まさに陶器と磁器の時代の分水嶺、唐三彩は白磁の新時代の幕開けに、歴史の終焉を迎えたのであります。

それはまさに神器「寶」が原因です。

さらに、話を前に進めます。

焼き物は、木火土金水、五行思想の五材で制作されます。

「寶」は道教の祖であり唐朝の祖である「太上老君」を祀る神器です。

神器「寶」は、道教宇宙の法理法則、天の理に合わなければ焼成は叶いません。

想像であるが、神器の焼成の窯は、巨大な人工ピラミッドの東西南北、斜面四方に構築された大型の**連房式登窯（龍窯）**であろう。

通常、素焼きの後の、本焼きは約 60 時間、3 日をかけて徐々に火力を 1300℃に上げ、同じく、3 日をかけて自然還元するとの事です。

想像であるが、一方の龍窯が冷却し、検分された後、次の龍窯に点火です。

初期段階は、一度の窯入れで、千個単位だったかも知れない。

しかし 600～800℃の素焼きの段階で、結果は茫然自失、目も当てられない惨状で、言葉を失ったであろう。

登り窯の中の獅子印は、捩れと変形、いや、木っ端微塵で、形も止めていなかったと想像されます。

本焼きの前の素焼きの段階で、99.9%不合格と想像されます。

本焼きに向かう前に全滅です。

陶工達は、神器「寶」に与えられた寸法その他の**“絶対不可欠”**な**“至上命令”**に茫然自失であったであろう。

その為一年も経たずに、個数は右肩上がりで、もはや万単位、数量の戦いであろう。

日本でも 1 回に茶碗類を 3 万個焼き上げる登り窯があったと云う。

陶工集団の経験則である 1 回に 6 日+9 日=15 日とすると年 24 回の火入れ、24×27 年×5000 体=3 百 24 万體である。

これでも最低ラインの数字である。

まさに、「寶」焼成は想像を絶する数量との戦いです。

いずれ、その膨大な燃料となる薪の確保で、人類史上、最大・最悪の人災が浮上いたします。

その問題は一旦後にして、龍窯の更なる改良と大型化、まさに筆舌に尽くせぬ挑戦であったろうと想像できます。

勿論、神器「寶」制作は戦略統合本部の指令下、陶工集団は、全て分業、流れ作業で組織化されている。

焼成までの 27 年間、何十人の道教導師が昼夜を問わず、護摩を焚いて読経し、火神の降臨を祈祷する。

陶工集団、導師達の、果てしなき祈り、戦いです。

「寶」の印台は皇帝の天下、「寶」は神器で、1mmの誤差も歪みも許されません。

しかも印台と獅子は一体で焼かれ、収縮率は当然違います。

昔から自然火力の焼き物は“火まかせ”と云われます。

「寶」の熱制御は、**火神**まかせです。

「寶」は、その何百万個、千万個単位の焼成の果ての、**神の化身、太極の一体**です。

拙者は、その為、この**神の化身の「寶」**を、現代科学の最先端、CTスキャンによる、内部撮影を、**十数年逡巡していたのであります。**

史実究明の為、**天に祈り、先祖の加護を信じ、決行したのであります。**

専門資料によると白磁の母体は青磁で、素地から鉄分を除去し、ケイ酸とアルミニウムを主成分とする素地で1300°Cの還元炎で焼き上げるとの事です。

「寶」焼成は**唐代の最先端科学、叡智の結晶**である。

神器「寶」は一般の焼き物の遥か天上、**神の領域**であります。

<其の三>

「寶」本に詳しく解説してありますが、今一度、**焼成不可能な条件**を更に確認致しておきます。

それでは、四辺の高さ47mmと、印面の一边7cm四方について今一度説明いたします。唐代度量衡で47mmを割り出すと、高さ一寸五分、「一」と「五」の數位が現れます。

「一」は地上界で只一人の天子皇帝の數位です。

「五」は五行思想の五數位で、焼き物の**五材・木火土金水**を征するの**も天子皇帝**です勿論、獅子「白澤」の齒は**5本**です。

そして印面四辺の和は $7 \times 4 = 28$ cmで、度量衡で割り出すと**9寸**です。

九數位は易の陽極の数で永遠・永久の數位です。

印面国土は**広大無辺**。地の果てまで**全て皇帝の天下**です。

即ち印寸法で「寶」が、唐代にドン・ピシャに合致するのです。

端数の0コンマ以下は水の表面張力、国土豊潤です。

マイナスは1mmも不可、アウトです。

印全体は白磁が基本ですが、それでも**天・地・人**、三才の色に仕上げてあります。

太極の韻文を鎮護する獅子は、言葉を話す神獣「白澤」白獅子で、白磁が基本条件です。

印面・地の色は、皇帝の色、黄色です。

黄色は、黄龍・黄河、国土は五穀豊穡の黄色です。

印台側面は人の色で、微かに人肌色です。

色の三才、天・地・人の完成です。

しかも、印台四面と印面には、自然神で一番怖い雷神の稲妻・嵌入を、東西南北・四方面と印面大地に入れなくてはなりません。

印台四方側面に風神・雨師を秘めた雲を配し、農耕の民の自然神、雷神・風神・雨師の配当です。

これらも絶対条件です。

一面が欠けても不可です。

正面、獅子の頭は正確な円を描いていなくてはなりません。



天円地方・獅子の頭は天で円形、地にあたる印台は正確な方形が絶対条件です。

そして背に九枚、腹に六枚の鱗うろこ、易の陽極「九」と陰極の「六」です。

まさに天と地を駆ける龍獅子です。

その他、獅子白澤には更に多くの道教法理が秘められ、付加されております。

以上寸法だけでなく、それらも完璧でなくてはなりません。

「寶」は神器です、即ち“神の化身”であります

寸法が成ったとしても、印面黄色・側面四面の雲と嵌入も完璧に配当されねば、全て失格です。

全て明確な意図、絶対条件が規定されて焼き上げられたのです。

想像すら出来ない“神器の絶対条件”です。

27年間、陶工集団の気の遠くなる戦いです。

中国歴代度量衡 (明代は歴史の事象すべてが合わない)			
歴代王朝	1寸	印面4辺の和 28cm	高さ 4.7cm
隋	2.951	9.488	1.592
唐	3.11	9.0032	1.51125
宋	3.072	9.11458	1.5299
明	3.11	9.0032	1.51125
清	3.20	8.75	1.46875

度量衡・時代ごとの表

<其の四>



陶工達の筆舌に尽くせぬ労苦に捧げる為、平成12年の「寶」本に載せた「寶」賛歌を載せよう。

それは印台四面の嵌入は「雷神」と、雲「風神」「雨師」を詠んだ、情景です。

これは印台の四面の嵌入と雲に秘めた、陶工たちへの献歌、愚生の祈りであった。

「光の序曲」

岩肌は深い霧と雲に覆われ断崖絶壁は天を突く。

一転、にわかには天地は騒ぎ風雲は急を告げる。

聖山を隠す霧と雲は一陣の風と共に飛燕ひえんと化し、

瞬く間に溪谷の岩肌を縫い断崖を滝かに化え、

一気に濁流となる。

天地の狭間はざまは消され、その闇を突く濁流は飛龍と化し、全天おどに躍る。

天地四海は、波打ち、龍神の海と化す。
 天地を揺るがす轟音は“一閃”“陰陽”の“裂け目”を現し、
 天地一切を“白”しめる。
 もはや“風伯”“雨師”“雷公”の競演です。
 息をもつかせぬ激しい雷雨は、天地一切を掻き消し、全てを浄化する。
 ひと時ののち・・・時は消え・・・天地鎮まり・・・
 “無音のシンフォニー”と共に“雲開き”
 神仙降臨を告げる“御来光”は微かな七色を帯び、
 手にも届きそうな“光の華”となって、眩しく差し込むのです。

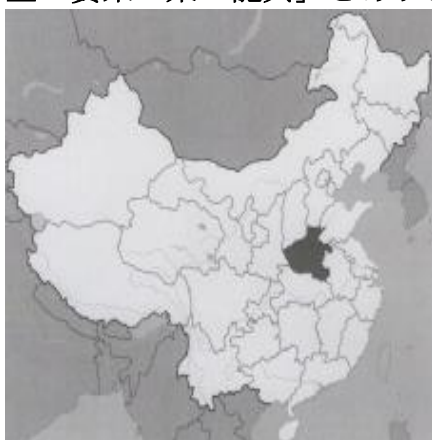
東西南北の四側面の嵌入と雲の文様は、風神・雷神・雨師の農耕の民の自然神を秘める、これも“絶対条件”です。まさに薄暮の中国山水画の真髄です。そして印面にも嵌入を入れ、五雷の完成です。一ミリの誤差の無い印台立方体に、更に神器に課せられた絶対条件です。“不可能宇宙”の“二乗”、太極宇宙、“神の世界”です。陶工達の果てしない戦い祈りが観えてきます。



<其の五>

③窯場は何処か。

それは神器「寶」制作の窯場立地の絶対条件であります。通常、窯場は陶石の採れる場所の周辺です。しかし「寶」は神器で、陶石の採れる場所は一切無視です。神器誕生の窯場は天の道理に叶う場所でなくてはなりません。印面、九文字の東西は日月で、北は、天帝が住む北極星で、南が空席です。南は南斗六星が輝く南極星の地です。洛陽から真南、約100キロ、南極星が輝く「龍興」の地です。「龍興」は龍=皇帝で、「興」は、まさに神器、興る、です。「大漢和辞典」漢字の最大画数64画の2文字の「龍」と「興」に「唐置く、河南省・豊・寶泉の東「龍興」とあります。



河南省の位置地図



汝窯・平頂山背後の山脈は痕跡なく悠久のままである。ここは世界の陶磁器研究者が未だ謎としていた頃、愚生が断言した唐白磁の窯場です。

まさに愚生が 23 年前、「寶」本で、断言した“予言の地”です。

そこは現在に至るまで、地震・洪水・兵火に見舞われた中原、河南の地であります。千里眼、承禎である、予言の地は、更なるその姿を現すであろう。

この唐朝が決定した窯場「龍興」選定の天の道理は「寶」本に詳しく書いてあります。いずれにしても、「寶」焼成の 27 年間、「龍興」の地に陶土と焼成燃料を搬送しなければなりません。

万里の長城に使用されたレンガを焼く燃料は、たいした量ではありません。力を注いだ始皇帝の秦王朝は、あっけなく 15 年で滅び、長城建設は、その間の 10 年で、約 100 万人の動員と云われます。

神器「寶」は、始皇帝から約 500 年も下った、中国 4000 年文化の黄金期、大唐の金字塔です。

神器「寶」から比べたら長城や 8000 体の兵馬俑は、さして驚くに当たらない。



万里の長城

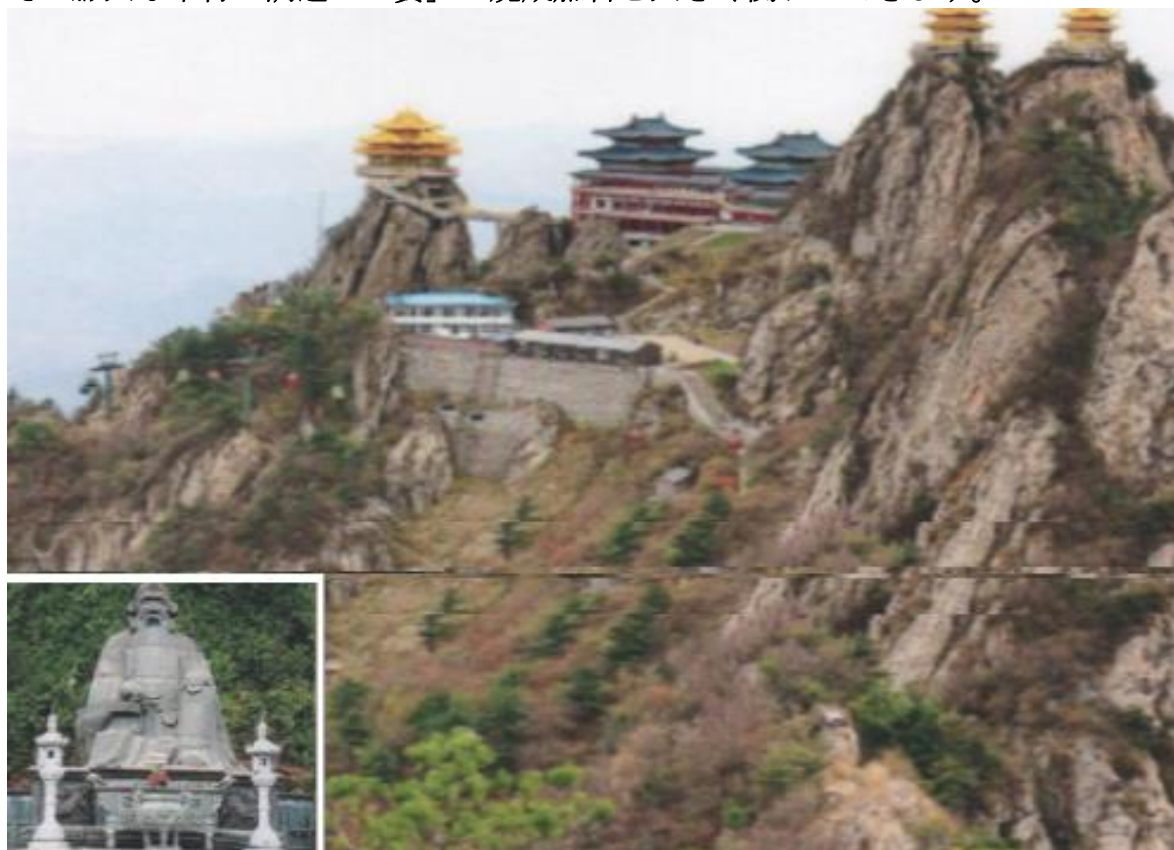
兵馬俑は、神器「寶」の奇跡の磁器に比べたら、低火度の原始的素焼きで、素人目には壮大感があって驚くだろうが、拙者には驚くに値しないのである。

始皇帝が没したのは 49 歳である。

玄宗は祖母の則天武后が見出した、姚崇などの名宰相に補佐され、盛唐の“開元の治世”が華開いたのである。

玄宗は全国各地に道教の老君廟・仏教の開元寺の建設を推し進めました。

その膨大な木材の調達「寶」の焼成燃料と大きく関わってきます。



老君廟



開元寺

そのハイライトが、安祿山に廃墟にされた、杜甫が詠う大伽藍「玄元皇帝宮」である。玄元皇帝廟は、上記写真の、老君廟や開元寺どころではない、天を突く大伽藍であったという。

即位した時、玄宗 27 歳、愚生より信心厚く、祖先を敬うロマンチストであった。ひきかえ始皇帝は、戦い一色、焚書・徐福の蓬莱に騙された、理解不能な皇帝である。そんな始皇帝の長城建設は、たかだか 10 年である。



大唐は則天武後の遺徳で、他民族とも良好な関係であった為、シルクロードも安全通行であり、玄宗は、始皇帝のように、長城建設に国力を注ぐ必要がなかった。

まさに楽天・幸運児であった。

玄宗の悲願、大唐の“至上命令”は神器「寶」焼成であります。

通常登窯では、高火力の出る燃料は赤松の木で、当時も適材である。

インターネットで、愚生が「寶」解明本で、20 年以上前に予言した寶豊県の東「龍興」の地は、現在河南省の平頂山市の近くです。

その平頂山市に汝窯の窯址が発見された。

清涼寺・汝窯の更に地下数mの地層か、10 km～20 km 広げた範囲であろう。

承禎の予言は広大な中国全土からみれば、99%の確率で、まさに正解であった。

<其の六>

インターネットによると現在河南省・宝豊県は臨汝県・平頂山市に組み込まれているようである。そしてこの地の清涼寺にある官窯遺跡が有名とある。この清涼寺周辺が「寶」の龍窯の可能性が大である。周辺は耕作地が広がり、近くには、良質な産炭地もあるらしい。



北宋汝窯青磁水仙盆

そして時代が下った晩唐に汝窯が勃興したという。

汝窯は「寶」に関わった「龍興」の陶工達の末孫が再興した窯であろう。

2017年、台湾故宮博物院の汝窯で焼かれ、徽宗帝も愛用した青磁水仙盆「天青色」が、大阪市立「東洋陶磁美術館」で展示され鑑賞してきた。

インターネットによれば、この汝窯で焼かれたのは約20年間だけで、廃窯となったとの事である。

「寶」最終仕上げの著書は、平成12年9月15日（2000年）で、実質25年前に、寶豊県「龍興」の地を予言している。

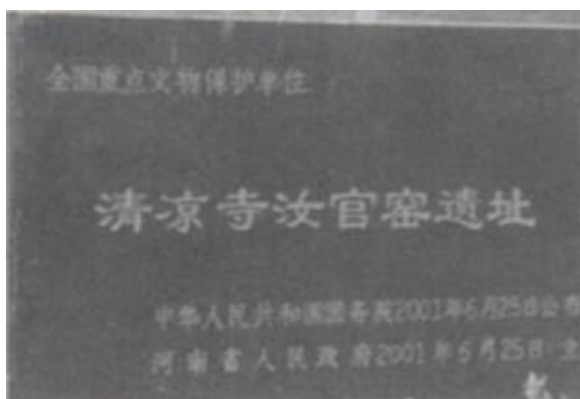
龍興の地は、汝窯の周辺か、発見されている汝窯の遺構の更に、数メートル下の地層と推理される。その汝窯の地に下記写真①の碑が建っていた。

碑文には「清涼寺汝官窯遺構址」とあり、日付は2001年6月25日となっている。

碑を建てたのは河南省人民政府とある。

この碑が建てられた日付の数年前に、中国を一度も訪れたことのない承禎がこの地を予言していたのである。

以下の写真の通り、碑が建った当時はまだ、発掘予定であった。



①博物館建設前の清涼寺汝官窯遺址



(発掘前の碑、承禎予言の地)

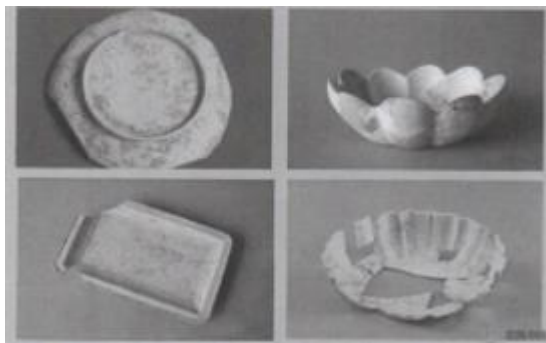
重ねて承禎が当てたのは上記写真①の碑の数年前である。

原書「寶」本と、お届けした200名近い諸先生が証人である。

千里眼・承禎の予言は凶星であった。

次に掲載の写真③は発掘の初期段階であろう。

そして、近年建設された④⑤⑥⑦の華々しくオープンになった汝窯の遺構記念博物館をご覧ください。



②汝窯出土陶片



③窯址発見まだ青空である



④近年完成なった博物館



⑤博物館オープニング式典



⑥大量の陶片の残骸



⑦ 博物館・館内の汝窯窯跡

まさに承禎の予言通りであった。

インターネットによると、汝窯の全貌はまだ明らかではないとある。

発見された、窯底の焼き固められた硬く厚い底の、更に数メートル下の地層も掘削の必要がある。

焼成の龍窯の地は即、神器誕生の聖地である。

人工の山と登り窯は完全に取り除かれ、そこには神器降臨を祀る神殿が建っていた筈である。

汝窯は晩唐から宋代に焼かれた窯で、「寶」の残骸は更なる数メートル下層の地層か、それとも兵火の址に再建されたと思われる写真⑧の白雀寺周辺か、想像は尽きない。

何百万個の「寶」の残骸は、発掘された窯址の更なる下層の地層であろう。

想像を絶する、残骸が埋もれている筈である。

インターネット（航空写真）で平頂山市周辺の地図を拡大してみると、日本の河川や



⑧平頂山市宝豊県・白雀寺

湖と違い、もの凄く蛇行していて現代でも護岸、治水が整備されていないのがよく分かる。

汝窯は「寶」から約 100 年下った晩唐で、その間 10 年に一度、下記のような洪水を予想すると、20~30 cmの土砂の堆積を考えると、発掘した汝窯の地層から、更に 2~3m下層と思われる。

愚生のモットーは、頭より行動優先・実践主義である。

しかし、陶芸と中国への旅行だけは残念としか言いようがない。

その為、中国旅行はビデオ・雑誌・等々。インターネットで中国全土を鳥瞰した。全て、時間の節約、「寶」解明に当てた。



河南省の洪水

余談だが愚生は歴史を観る時、地図と自前の年表、それに現地足を運ぶ、加えて人間洞察が必要と考えている。

しかし時間と現実面で及ばず、その点だけは各位に御了承願いたい。

河南省は戦国期より治乱興亡、中原の地である。

これ以上は、歴史を待つしか術は無い。

確かな事は、エジプト最大のクフ王のピラミッド建設が 20 年、神器・太極「寶」の事業は 30 年、愚生と似た、夢想家・楽天・玄宗の史上空前の国家事業であった。

<其の七>

④の陶土の産出鉞山は、汝窯の博物館の学芸員の方々が既に答えを出しておられよう。

中国を旅していない、愚生が、錯誤すれば、小誌全体の信用が問われる。

0.2 (底辺) × 0.2 (底辺) × 0.2 (高さ) × 1 億個 = 80 万立方である。

生活雑器を入れたら、その倍、約 160 万立方である。

それでも陶土となる鉞石は、標高 300~500m級の鉞山、一山もあれば足りる筈です。

この問題は、オープンになった汝窯博物館の学芸員各位に任そう。

この最終章<其の十>で、玄宗の「寶」による人類史上最大かつ最悪の人災に出会うことになる。

諸先生方は人類史上未曾有の人災を史実として受け止められるであろうか。

視力に近視と遠視、あると同時に、思考する脳にも近視と遠視があるように思える。

学者の諸先生は顕微鏡タイプ、愚生はレンズの歪んだ望遠鏡タイプ。

自覚症状は無いが、どうも愚生は、脳味噌が発酵したアルツハイマー病のようである。

秘書が、何時も呆れている

次へ進もう。

<其の八>

⑤最終章の前に幻の篆刻士の特定です。

太極・の九文字を考案した天才・司馬承禎を歴史の闇から檜舞台に登場させた、平成承禎である。

この難問だけは、専門家各位にお任せのしか術は無い。

「寶」の製作年代に符合する盛唐には顔真卿・李陽水・徐治・他キラ星の如く能書家がいた文化の黄金期である。

愚生は過去、確実に千人以上の書を見てきた。

その中で好きな書は40年前、参禅した高岡市西田の国泰寺館長・稲葉心田和尚、そして「寶」を喝破した京都有鄰館・藤井善三郎館長の書、他数人である。

掲載の「勅」の文字は玄宗の直筆である。

玄宗のこの「勅」の一文字に、並々ならぬ、非凡を観るのである。

その玄宗の眼鏡に適った能書家の篆刻士であろう。

さらに、唐代に印面の余白を埋める九疊篆と言う篆刻技法が生み出されている。

非凡な篆刻士がいたことが、推察される。

資料が乏しく特定は困難で、これ以上の追及は諦めた。

陶土と同じく、幻の篆刻士一人の誤謬で、小誌全体が疑われかねない。篆刻士は印面九文字に3年を要している。

何故、3年か、それは玄宗皇帝の尊号で明白である。

(パート2・其の四 参照)

尊号の架上で篆刻年数が分からぬなら史家失格である。

それはさておき「寶」は高密度な、史上空前の磁器である。

果たして、彫れるのか、愚生の範疇外であります。

彫刻刀の切先が、超高密な磁器に対抗できるのか、愚生に科学的知見は無い。恐らく、この九文字を彫り上げるのに、何万本、いや何十万本の彫刻刀が用いられたのか想像が及ばないのである。

30年前、幾人かの印章店の主人に、陶磁器で彫った経験があるかと訊ね回った事があります。

皆さん、あらゆる材質を彫ったが、陶磁器だけは、経験はないとの事でした。

恐らく、幻の篆刻士は1mmの誤差や歪みで不合格となった獅子印で、27年間、ひたすら修練の^{のみ}鑿を揮ったであろう。

これまた陶工達に負けぬ、果てしない戦いであります。

印面の九文字の鑿あとに、神に祈り、身を清め、格闘した篆刻師の姿が目に浮かびます。

27年間を費やし、焼成なった神器です。

“陽文陰漫”鑿音は正確な時を刻む。

一心不乱、天に祈り彫り進む、一撃の失敗も許されません。

失敗は五族九族に及ぶ重罪です。

以上、この幻の篆刻士の問題は、インターネットに載る唐代資料を掲載し、各位の寛容を願う次第です。



「日界月界太上老君勅」



玄宗皇帝直筆の書



<其の九>

⑥それでは、焼成の燃料となる樹木は何処で調達されたか。
なにせ約 30 年間、昼夜を問わず焼き続けてきた「寶」である。

「寶」と唐白磁、何千万個、何億個である。

当時の 5000 万人の生活用品の焼き物、王侯貴族の明器・唐三彩も同時に焼かねばなりません。

更に、エジプト・チクリス川上流のサマワの町ですら、唐白磁が発見されております。純白の陶白磁は、世界に鳴り響いた大唐の交易品であります。

「寶」焼成燃料には、想像を絶する広大な森林破壊が浮上いたします。

それでは燃料となる樹木の、とんでもない歴史のブラックホールに進みます。

河南省平頂山市「龍興」「汝窯」の背後に延びる外方山脈・伏牛山脈のインターネットで現代の写真を見ると、悠久の光景です。

千里眼承禎の閃きは、唐代以前まで、広大な森林の大地であった黄土高原であります。

愚性には何十年間、中国のイメージは森林が少ない国とのイメージがありました。

中国に一度も旅した事の無い自分ですが、森林が日本に比べて少ないイメージです。

それは、万里の長城の内外両側に森林がない。

敦煌やタクラマカン砂漠、そして砂漠化した黄土高原のイメージがあったからです。

その黄土高原は、山西省・陝西省・寧夏回族自治区に広がる、日本の 1.7 倍と云われる広大無辺な不毛地帯です。

黄土高原が何故禿山なのか、神器「寶」が原因と断言したら、日中の学者全て、茫然自失そして喧々譁々であろう。

しかし愚生は、窯場の龍興を予言したと同様、閃いた瞬間、神器・太極「寶」が、原因と即断したのであります。

インターネットによると、秦の始皇帝時代、黄土高原の森林の被覆率は 50%であったとある。

被覆率 50%なら、まだ回復の可能性はあった。

始皇帝の長城のレンガや兵馬俑などは、高火力の松の木でなくても、雑木でも焼ける筈である。

勿論、石炭でもいいのである。

その石炭は既に戦国時代の遺址が確認されているとの事で、中国は産炭国である。

インターネットには黄土高原から森林が消失した原因は、始皇帝時代と漢の時代とあるが、二つの時代で、黄土高原を禿山にするのは論理的に絶対無理である。

歴史家は「寶」の存在を、知らず、唐代を完全に剥落している。

現在黄土高原の森林比率は 5.3%で約 13 億とも云われる人口の約 2000 万人しか住んでいないという。

黄土高原は、高原であって、富山湾から望む、対岸の立山連峰の様に、2500m以上の高山ではありません。

標高は、800m～1500mで、一番高い標高で2000mとの事です。

我が町対岸の立山連峰（3000m）級になると、頂上付近では立山杉などの森林が消え、高山植物の世界です。

重ねて、黄土高原は、高山ではなく、高原です。

西日本に飛来する黄砂の原因は、「寶」発、黄土高原であった。

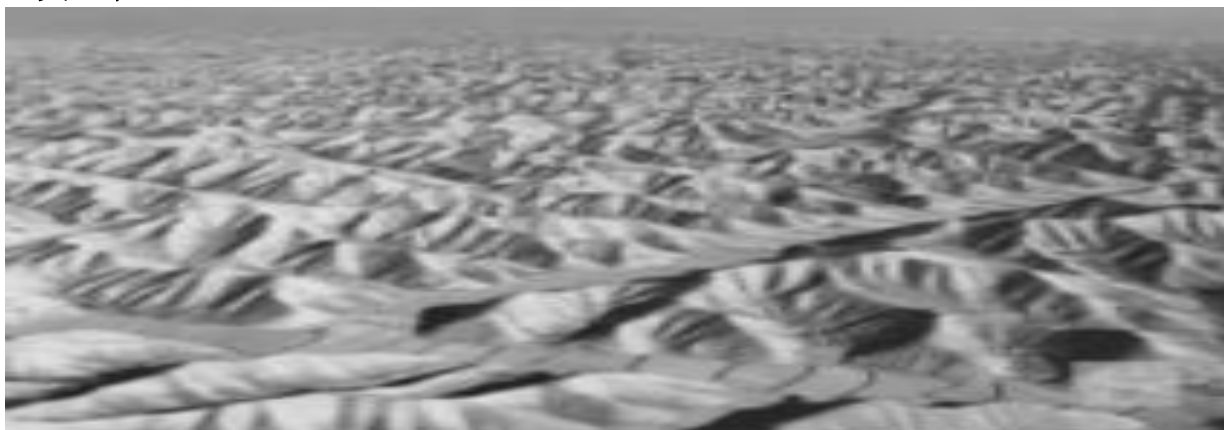
愚生が、世界の陶工が、日本に集結をして「寶」焼成再現に挑戦するなら、日本の国土から森林が消失すると繰り返し述べてきました。

「寶」の窯場を現在の平頂山市、昔の宝豊県と予言し、正に当てた。

間違いは無い、避けて通りたい人類史上最大の人災です。

それでは、とくにご覧あれ。

<其の十>



黄土高原



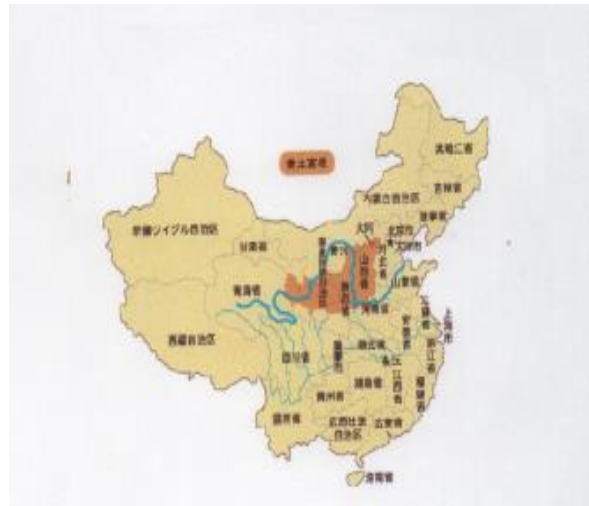
黄土高原

黄土高原は、山西省・陝西省・万里の長城の内・外、そして黄河・黄龍が大蛇行の、西北に向かって広がる荒涼たる大地です。

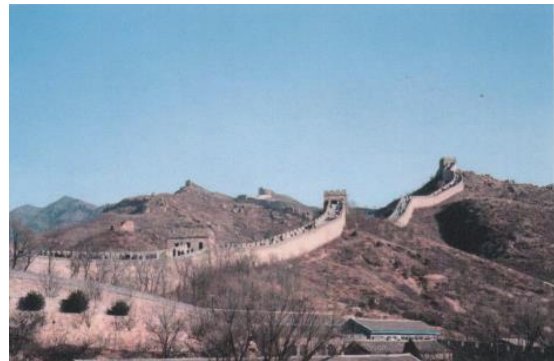
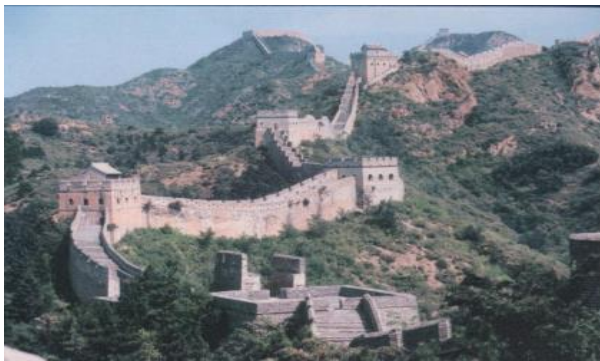
またインターネットで万里の長城の数十枚の写真を見ると、長城の内側外側どちらを見ても、大きな樹木が殆ど生えて無い。

長城の標高で一番高いところで約 1000 mです。

気象条件を考慮しても、少な過ぎます。節度使・安禄山が 15 万人の兵で守護する北京の北にも万里の長城があります。



黄土高原



万里の長城全長約 2 万キロ。大樹は無い。標高は約 1000 メートル以下

まさか、安禄山が 15 万人の募兵を 30 年間、匈奴との戦争の訓練だけに、ただ飯を食わしていたなど、絶対に有り得ません。

財政問題があります。

愚生は個人経営で約 40 年間、断崖絶壁の吊り橋を渡ってきました。

時代や国境を超えても、経営原理は冷徹であります。



黄土高原

さて節度使制度の制定は 710 年とあるから「寶」スタートのほぼ前年である。

^{うかつ}迂闊であった。

節度使制度は、希代の女帝、則天武後の時代からと、頭から決め込んでいた。

まさに「寶」焼成を睨んだ新制度であった。

節度使とは辺境警備の、民政と財政そして軍を握る地方長官である。
節度使が動かす軍の兵員は募兵制で日当を支払わねばならない雇い兵である。
唐朝は安西・北庭・河西・范陽・河東・嶺南など他計 10ヶ所に辺境警備の“節度使”
を設けた。

玄宗時代は、現代中国同様、バブル期でした。

雇い兵の殆どは、そのバブルに乗れなかった盛唐の離農民である。

付け加えるが、現代中国のバブルをインターネットの写真 1500 枚以上で、ほぼ全土を
鳥瞰した。

安禄山が反乱を起こした時の兵力は 15 万～20 万とも云われる。

仮に 10ヶ所の節度使を各々過少に計算して、5 万人としても、50 万人の傭兵である。
その傭兵達に、規律を設け、ノルマを課し、いざという時の戦闘訓練に日頃から体を
鍛えねばならない。

そして、勿論、日当を払い、飯を食わせねばなりません。

その 50 万人の 90% を使役したとしたら 45 万人です。

30 年間森林伐採に従事させたとしたら、45 万人×30 年×300 日で、延 40 億 5000 万人
です。

総勢 5 万を 2000 人単位の小隊に分けるとすると、25 部隊です。

25 部隊に計画を立て、ノルマを課し、伐採を競わせます。

長城国境沿いに 2000 人単位の 25 小隊×10 節度使、計 250 軍団が横一列で北上です。
想像しただけで圧巻であります。

始皇帝の時代の人口は約 2000 万人、玄宗の開元時は約 5000 万人（通典）、約 2.5 倍
で国力が圧倒的に違います。

始皇帝が万里の長城に使役した人数は 10 年で約 100 万人とある。

同時、兵馬俑・匈奴防衛の軍用道路・直道の建設もあった。

国力を無視して臣民を酷使した秦は、あえなく 15 年で崩壊です。

始皇帝と比較にならぬ大唐で、玄宗は約 45 万×300 日で、年間 1350 万人、30 年で
40 億 5000 万人である。

その 45 万人の傭兵が、国境の万里の長城の内外、そして北上である。

国境線の十か所の駐屯地から、30 年間伐採をしたら広大な黄土高原も丸坊主であろう。
人類上最悪の人災、史実に戦慄、茫然自失である。



黄土高原



黄龍・黄河



黄土高原

森林を伐採した木材は全国に建造した老君廟・開元寺の膨大な木材に使用である。そして、唐代の 5000 万人の生活雑器も同時に焼く。

勿論一番は神器「寶」である。

であるから節度使は、伐採した燃料は唐朝に買い上げてもらう。

勿論、“唐朝の要請”である。

さすれば、傭兵の体力増強、伐採により長城の外側の匈奴との緩衝帯、視界も広がり耕作地も増える。まさに一石三鳥である。

かくて、27 年間の焼成燃料の確保は出来た。

勿論、陶土の採掘と運搬も同様のシステムである。

このような雑役に近い仕事は史書に残っているのか、はなはだ疑問である。

唐代の国家財政と節度使の収支表を調べねばならない。

であるから、日中の史家誰一人、分からなかったのである。

いずれにしても、約 30 年間の果てしない伐採の拡大により、黄土高原は再生不可能な荒涼たる不毛の大地となった。

玄宗には参った。

始皇帝はじめ人民を殺戮するのは、中国歴代皇帝の、常である。

しかし、これは“地球破壊である”

黄河の源の清流が、茶褐色の黄河となり、そして日本に飛来する黄砂も、玄宗の「寶」焼成の号令が原因であった。

インターネットによると、黄土高原の砂漠化は気候条件による原因が 5%で、95%が、人的要因とある。

まさにその通りである。

この手の平に載る、獅子印「寶」が元凶であった。

四世紀末に山西省のモンゴルに近い大同に北魏の都が置かれ 100 万人都市であったという。

即ち、都市周辺に豊かな自然と農耕地、森林地帯が広がっていた事になる。

歴史に載らない「寶」焼成による伐採は、黄土高原全体の回復力を奪う決定的役割をしたと、断言せずにはおれない。

黄土高原には雨量は少ないが、それでも牧草や森林を養う最低限の降雨はある。



灼熱のサハラ砂漠ではない。

人類史上最悪の玄宗皇帝による人災であった。

この手の平に載る「寶」が、**広大無辺の黄土高原を丸裸にしたのである。**

インターネットによると黄土高原は季節風により、タクラマカン砂漠や、ゴビ砂漠から何億年をかけて飛ばされ堆積した高原とある。

その堆積の黄土は、地表からの深さは**50～80m**との事である。

多くの写真でも、**広大無辺な黄土高原が、均質な土壌であることが、一見して分かる。**

多孔質で粘着性に乏しく降水の度に流動する性質との事である。

日本の国土のような、多様な土質ではない。

であるから、松の大森林地帯も表土を取り除けば、愚生の想像力を超えて、伐採速度は速いと思われる。

以上これにて**27年間の想像を絶する焼成の燃料は確保した。**

人類史上最悪の人災である。



人類史上最大の人災・黄土高原

<その十一>

登り窯の焼成燃料に使う松科の植物に付いて、私見を追記しておこう。

インターネットによれば、松科の植物は、北はロシアからカナダに至る北半球に広く分布する。

50年前のサラリーマン時代、シベリアから輸入される北洋材の検数業務に従事していた。

何千トンのロシア船籍で運ばれる木材は赤松・エゾ松・紅松などの針葉樹である。

広大なシベリアの原生林も松科の荒涼たる大地である。

松科は気象、土質等々、自然環境に適性があり、種子は**風散布型**で、風に乗り分布域は遠く亜熱帯まで広がる。

また、世界遺産中国**武陵源**の、不毛と思える奇岩に**繁殖する生命力に圧倒される。**

愚生には、この湖南省武陵源の岩松は、その昔、黄土高原の豊かな松の大森林から、黄砂とともに飛散してきた、**1300年前の末孫と映るのである。**

松の木の適応力と、生命力は、大自然の驚異である。



武陵源

日本の山々を見ても、松科の群生の習性には納得する
天橋立のように養分が殆ど無い海岸線の砂地で、塩害にも負けぬ松の繁殖力と生命力は驚異的である。

元来、北半球が生息域の松科が黄土高原より、緯度が更に下の日本の海岸線まで繁殖している。



天橋立の松並木

余談だが、シベリアのエゾ松・赤松等は、空に向かって真っ直ぐな直木である。
高い木になると 50~80mの樹高もあるという。

しかし、一般に知る松は、海岸線の松や盆栽などに見る、多様に変形した幹と枝である。

松科の環境に対する適応の脅威である。

全国に建立した老君廟や開元寺・玄元皇帝宮・洛陽長安の建築資材に使用された黄土高原の松の木は、シベリアの直木と我々の知る松の木と中間の松の木であったと想像される。

黄土高原はシベリアと湖南省の武陵源の緯度から見て、中間線より少し下に位置する。
松科の姿態の変容に、DNAに秘めた順応性と繁殖力、驚異的生命力に驚かされる。
いずれにしても黄土高原が地球の松の木の宝庫、世界一の原野であった事は、想像に難くない。

何年か前、北朝鮮から特産のマツタケを輸入していた。

大好きな、マツタケ、松露^{しょうろ}、アミタケなどのコケ類は、松林に寄生する。

黄土高原と北朝鮮と緯度は、ほぼ横並びである。

黄土高原は、間違いなく玄宗時代、松の木の大森林地帯であった。

古来より中国に松の木を画いた山水画は多い。

アジアに昔から、松の木の名前の由来に「神を待つ（まつ）」「神を祀（まつ）る」があると云う。

松の木に森羅万象の精霊が宿ると感得したのであろう。

日本では、松・竹・梅は、吉兆の神飾りで、松は、その筆頭である
であるから、神器「寶」の焼成燃料は、神木「松」と定められたのであろう。

汝窯は晩唐から宋にかけて約 100 年下った時代である。

汝窯の陶工は石炭火力を併用した可能性も否定はできない。

しかし「寶」は時代を約 100 年遡った盛唐で、しかも「寶」は神器である。

焼成の燃料が、精霊の宿らない、真っ黒い無機質の石炭は有り得ない。

樹脂は松脂で、根に多く蓄えていて、根の火力は、幹より一段と高いのである。

さすれば、広大な松の木、果てしない樹林と想像される黄土高原の松は、根元から掘り起こされたのは、間違いない。

建築用の真っ直ぐな松は建築資材、火力の一番高い根の部分は「寶」焼成の燃料である。

重ねて黄土高原は、有史以来、松科植物の地球の宝庫であった。

万里の国境沿いに、10ヶ所に配備された節度使率いる、約 50 万の組織軍団が、30 年をかけて、北上である。

何千万本、何億万本の松の木が根元から掘り起こされたとしたら、さしもの豊かな松の大森林も再生不可能である。

地球環境など考えもしない時代の、人類史上、未曾有の蛮行、暴挙であった。

この手の平に載る陶磁器「寶」一個による、地球に対する取り返しのつかない人災を引き起こした。

まさに人類史に刻される人災である。

茫然自失、呆れ果てて、これにて承禎の思考も停止である。

<その十二>

最後に幾つかの点を付け加えておきたい

◆黄土高原と松科

インターネットによれば黄土高原の緑化に「緑の地球ネットワーク」が取り組んでいるという。

それによると、万里の長城の内側、山西省大同地区の黄土の緑化には、モンゴル松・アブラ松・落葉松が主力となって、ヤナギ科・ヒノキ科と混植し植林事業を展開していると云う。

黄土高原の自然条件と松科の適性を考えての選定である。

太古以来の黄土の復活に、松科は無くてはならない種族である

愚生は、全くの素人であるが、まさに正解である。

気象条件の厳しい、黄土高原の松の木は、普通の樹木より、深く広くその根を張ったであろう。

まさに松の木の根は「寶」焼成の適材であった

これ以上は植物環境学者の領域である。

◆“節度使制度”は、「寶」制作の勅令、約一年前である。

ということは、「寶」焼成は、玄宗の父親・睿宗のたつての願いである。

睿宗は司馬承禎の数術に感銘を受けている。

玄宗は、その父親から「寶」の九文字、太極の神秘を聞かされていたのは間違いない。

それは「寶」スタート「開元」の前年が、印面九文字に刻された「太極」の年号で分

かる。

そして、開元元年、唐三彩、明器の届け制の勅令。

太極、同年「節度使制度」募兵制の創設である。

全ては玄宗の父親・睿宗から引き継がれた至上命題である。

それらの建策は、後世、「開元の治世」と謳われた玄宗側近の、名臣と謳われた、姚崇・宋等の献策であった。

唐朝にとって名臣であるが、地球全体から観たら迷臣で、人類史上に刻される暴挙、失政である。

全国各地に建立した老君廟・開元寺を多少評価したとしても、楊貴妃に^{うつつ}現を抜かした、総括責任者、夢想家・楽天皇帝、玄宗の全責任は免れない。

なお、安史の乱を起こした時、安祿山は3ヶ所の節度使を統括していたと云う。

小誌は節度使10ヶ所を平均5万人と勘定した。

期間を「寶」完成は天寶元年の742年で30年として計算をした。

しかし安史の乱まで、更に約13年ある。

「寶」焼成後も引き続き、唐白磁を焼き続けたとしたら約43年である

一か所の駐屯兵を引き下げ、3万人として×10ヶ所×43年×300日＝延べ38億7000万人である。

いずれにしても約40億人で、黄土高原は広大な禿山である

◆「寶」の残骸の再利用もゼロとは言えない。

「寶」の残骸は、超高密度の陶片である。

その残骸を再度、粉々に粉碎して、獅子の成形に当てる。

窯場の地名は「龍興」で「龍」の再生「興」こるである。

とすれば、繰り返しの再生利用で、残骸が想像よりも少ない可能性も有りうる。

陰陽表裏で、硬さは脆さである、「無」から再生「龍」「興る」で有る。

低火度の素焼き段階でのあまりの惨劇に、それらの不合格品を、陶工集団が再生陶土として利用法を思いついた事もゼロとは言えない。

以上、本誌の推論に牽強付会はあるか、矛盾はあるか。

日中はもとより、世界中の歴史学者のご意見、ご批判を、待望する次第である。

神器「寶」が、荒涼たる中国を嫌って、四季を彩る、緑豊かな日本に辿り着いた、天の意向が、分かるような気がする。

まさに、漢文化の歴史は塗り替えられた。

<あとがき>

この陶磁器部門の窯場確定・陶土の採掘地・黄土高原の問題等々は、日本中の諸先生に、ご批判、ご意見を是非とも仰ぎたい。

昨今インターネットの充実は有難い。

もし無かったらこの小誌だけで、原本「寶」本と同じ、再び8年は要したであろう。

中国世界遺産シリーズのビデオ全巻、そしてインターネットで、バブルの中国沿海都市そして内陸部ほぼ全域、2000枚以上の写真で旅した。

そして広大な国土、治乱興亡、悠久の歴史を、地に吠え天に叫び、大陸を鳥瞰し、遂に書き上げた。

広大な国土であり、各地の距離、長城、黄土の標高その他に多少の錯誤もあろう。

しかし枝葉な錯誤はあっても、歴史の太脈・大本に深い矜持がある。

天地不動は、地球上に一点も無い、焼成不可能な、神器・太極「寶」である。

余りにも膨大、かつ多岐にわたる推考で、33年間、確実に10万時間以上を費やした。各々細部は、後の関係者に任せるより術は無い。気の遠くなる歳月であったが、今は“一炊の夢”である。1300年の彼方より、放たれた「寶」解明の、玄宗の直筆の「勅」の矢文、これにて大任を果たした。

小誌パート①②③を確認しておこう。

- ◆ 「寶」太極の九文字は、茅山派12代宗師・司馬承禎である事。
- ◆ 漢文化圏に伝播した獅子文化は「寶」を鎮護する獅子「白澤」が基である事。
- ◆ 「寶」制作を命じたのは玄宗皇帝である事。
- ◆ 安史の乱は神器「寶」争奪戦あった事。
- ◆ 「寶」は楊貴妃が携えて、日本に渡来した事。
- ◆ 「寶」は光明皇后、孝謙天皇により奈良七大寺に献納された事。
- ◆ 「寶」は七大寺から足利義満・義政そしてコレクター信長が手にした事。
- ◆ その信長から、秀吉そして前田利家そして加賀富山藩に来た事。
- ◆ 「寶」は焼成不可能で人類史上未曾有の至宝である事。
- ◆ 「寶」焼成の聖地は、現在の河南省平頂山市の寶豊県周辺である事。
- ◆ 日本の国土の1.7倍の黄土高原の荒廃は「寶」焼成によるものであった事。
- ◆ その他。

神器・太極「寶」の解明により、漢文化圏の歴史書・教科書等々何億冊が書き換えに迫られる。

小誌パート①②③に附会はあるか、矛盾はあるか、死角はあるか、自問自答を繰り返した。

小誌に枝葉な錯誤はあっても、歴史の大脈・大本に間違いは無い。

以上、日本中の関係者に問うものである。

神器・太極「寶」は日本国の威信を懸けた戦いである。

「寶」解明は先達のお陰であるが、過去何十年間、愚生の問い掛けに応じて戴けなかった。

歴史文化は人類共有の財産で、以後、黙視・背走は学者としての大罪と心得る。

最後に、温かく見守って戴いた指折る諸先生、そして友人各位に改めて深く感謝申し上げる次第である。

平成30年2月15日



獅子舞のメッカ氷見



獅子と貴妃（唐獅子牡丹）

和漢・太極「寶」歌』



この『和漢太極「寶」歌』は、尊師・司馬承禎が考案した、太極奇跡の韻文・九文字同様、未来のスーパーコンピューターでも、解析と創造は不可能な奇跡の和歌である。

この和歌には、陰陽五行・音訓・語彙・語訳・和数術などの異次元パズルで、日本版「太極宇宙」が秘めてある。

読者は、「寶」本を読んで、この太極歌を解けるか。

解けたとして匹敵する歌を詠めるか。

この和漢太極「寶」歌は、日本で指折る阿呆の矜持であり、神器・太極「寶」の壮大な史実の裏づけでもある。

解明「寶」本の最終段階の約3ヶ月、祖先祈り、この和歌を天より授かり平成承禎を拜命したのである。

全ては天命宿命であった。

完

<参考文献>

著書「中国歴史の旅」 陳舜臣

<インターネット>

- ①節度使 ②黄土高原
- ③万里の長城 ④汝窯
- ④陶磁器 ⑤その他

和漢太極 平成承禎